
仮想体験型世界『VEL』

夏伊茅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮想体験型世界『VEL』

【Nコード】

N9321R

【作者名】

夏伊茅

【あらすじ】

仮想世界を現実と同じように体験できるオンラインバーチャルソフトラ『VEL』。

ログイン中、大学生の三好澤真は悪質なクラッカー「ゼロ」によってゲームの中に閉じ込められてしまった。そんな澤真を助けたのは現実にいる魔法使い（ウィザード）級ハッカー、波城逸哉。彼の技術で、澤真は仮想世界で最強の力を持つ救世主となる。

閉鎖された『VEL』と勇敢な仲間、乗っ取られた開発会社のシス

テムと新たなハッカーたち。

「内世界の救世主様」と「外世界の魔法使い」の絶妙なコラボレーション、恋愛要素ありの頭脳戦小説。

『VEL』～空想の現実化～

『なりたい自分で理想の世界に！』

たいそうな謳い文句につられ、mixi、ピグ、アバター、facebook、人々は様々な仮想世界にのめり込んだ。一時の流行と化したが所詮、仮想は偽物。しだいに人々は疑似体験ソフトから離れていった。

そんな時に日本のIT会社で開発されたのが、

仮想体験型世界（Virtual Experience Land）通称『VEL^{ベル}』

従来の仮想世界ソフトと違い、VELは意識そのものを現実世界から切り離して仮想世界に飛ばすことができる。つまり、自由自在に操作することが出来る”夢”のようなものだ。

登録は簡単。市販の専用デバイスを購入して個人情報を入力、マニュアルに従ってアバターを設定したり自分の部屋を決めたりする。月々の会費は無料で、装飾品や能力を追加したい場合にお金となるチップを購入。トップアイドル並みの容姿にも、剣豪や魔法使いにだってなれる。

バーチャルエクスペリエンスランド『VEL』は、まさに”なりたい自分を仮想世界で体験できるシステム”なのだ。

デバイスの生産が追い付かないためまだ日本でしか普及されてい

ないが、究極の仮想世界であるVEIは世界中から注目を集めていた。

理想郷と脅威

大学二年から三年になる春休み、三好澤真ミヨシタクマは起床早々、パソコンの前に座った。片手で携帯をいじりながら電源を入れる。

「あー、ポストに手紙入ってる。直接読みたいしな、PCからログインするか」

携帯を投げ捨て、Windowsの起動画面を眺めた。

「眠い……まだ九時か。三時間はできる」

肘をついてうとうとしていた時、携帯電話が鳴った。着信画面には「波城逸哉」の文字。

「もしもしー、どした？」

「なんだ、お前。起きてたのか」

電話の主は間違はなく波城逸哉ナミシロイツヤ、大学に入ってきた澤真と同じサークルの友人だった。

「第一声がそれかよ、失礼な」

「だって冬休みは昼過ぎまで寝てただろ？」

「節電だよ。起きるとエアコンとかで無駄な電力消費するだろ？」
「はっ、どうだか」

たいして興味なさそうに逸哉が言った。電話の向こうでキーボードを叩く音が聞こえる。スピーカーフォンで話をしているのだろう

か。

「ところで、何の用だよ？」

『ああ、いや。約束覚えてるかと思って』

「覚えてるよ。一時に駅前の時計台に集合だろ」

『遅刻せずに来いよ。ついでにおまえ今、なにしてる？』

「なにつて……」

携帯を左手に持ち替え、右手でパソコンの暗証番号を入力した。

「ちよつと、ゲームでもしようかと」

『はあ？ まだあのVELってやつやってんの？』

「いやいや、あれ今一番の流行だから」

エンターキーを押すと画面が変わり、デスクトップの壁紙が表示された。大好きな美少女キャラがウインクしてる。我ながら痛々しい。

「自分の理想の容姿で、好きな世界に行けるんだぞ。画期的な発明じゃねーか」

『イケメンの仮面を被って庭園を歩き回る澤真タクマの姿が思い浮かぶ』

「おい、失礼だろ」

確かに、アバターは俺が想像出来る限りのイケメンにしたし、一番好きな場所は長閑な庭園だが。

「逸哉はVELをやったことないから楽しさがわかんねーんだよ」
『やったことはあるぞ？』

「……………は？」

思わず素っ頓狂な声を出し、マウスを動かす手が止まってしまった。

「やったことあるって、VELを？」

『ああ、発売当日にダウンロードした』

「いやいや、発売当日ってかなり混んでたぞ。俺みたいに運良くダウンロード出来ても、デバイスが売り切れで……」

『デバイスなんか自分で作りゃいいだろ？』

あー、そうでした。逸哉は魔法使い（ウィザード）級のハッカーだった。情報を盗み出してデバイスを作ることなんか朝飯前なんだろう。

「でも逸哉、それって犯罪……」

『親友として忠告するけど、あまりそのゲームやらないほうがいいぞ？』

「は？ つーかお前、俺の話……」

『セキュリティ甘いし。最悪、ログインしてる人間全員、仮想空間に閉じ込められる可能性がある』

「……………ん？」

『例えば、澤真がログイン状態の時に俺がお前のデバイスをハッキングして侵入するだろ。んで、勝手にもう一度ログインする』

「おいおい、やめろよ。そんなことしたらVEL内に俺が二人存在する……」つーかその前にバグが起きるだろ？

『素直にバグが起きればいいんだが、もし相手が悪質なクラッカーだった場合、勝手にログアウトされるぞ』

「……………へ？ だって、そんなことしたら、ログインしてる本物の俺は……………」

『言つたる？ 閉じ込められるって』

分かり易い逸哉の説明に、さすがの澤真も恐怖を感じた。従来の仮想空間ソフトならまだしも、VELは体験型仮想空間。意識ごと飛ばされてしまうのだ。

「いや、でも……そこは開発した会社がしっかりしてるだろ？」

『どうだか。開発者は俺らと同じ日本人だぞ？』

「……でも良いように考えてさ、向こうの世界のほうが楽しいし……」

『実はどうなってもいいのか？』

「それに、そんな事態になったら開発者の人が助けしてくれるだろ。俺には逸哉もいるし」

『バカ。そういう安直な考えが……あ、ごめん。朝ご飯だ』

「……は？」

『うち実家だからさ、親がご飯作ってくれんの』

「それは知ってるけど……」

『澤真も来る？』

「いやいや、なんでだよ」

『一人暮らしじゃ寂しいだろ』

「別に寂しくはねーし。つか、ご飯大丈夫？」

『あ、じゃあ澤真、昼の一時に時計台な。ゲームもやり過ぎんなよ』

「えっ、ちょ……逸哉さん……」

だが、電話は既に切られていた。不通になった携帯を眺め、澤真はため息をつく。

「ったく、いい奴なんだけどフリーダムなところがたまにキズだよな」

絵に描いたようなB型、実際の逸哉の血液型はAB型なのだが。

澤真は携帯をベッドに放り投げ、PCの画面を見つめた。

「……よっし、行くか」

脇に置いていたデバイスを耳にはめ、ログインを押した。

* * *

目を開けると真っ白な壁が見えた。”俺の部屋”だ。立ち上がり、手を握って感触を確認する。次に部屋の隅にある全身鏡で容姿をチェック。程よいふわふわのパーマ、横顔に軽く金のメッシュを入れた赤系の茶髪。

無地のＴシャツにダウンのジャケット。うーん、これはちよつと……冬物すぎるな。

耳につけているデバイスのメニューボタンを手探りで押すと、目の前にパソコン画面のようなモニターが現れた。様々なメニューが表示されており、澤真はデバイスに触れながらカーソルを「買い物」まで持っていく。そこでエンターボタンを押すと、画面に新作春物服がズラリと並んだ。

「あ、これいいなー。お金は……1120p。俺こんな持ってたっけ？ あ、そっか。携帯で広告クリック頑張ったもんな」

カーソル移動、エンターボタン、ワンクリックで春物のジャケットを購入。金額の支払いが終わった途端、ヴンと胴体にモザイクがかかって衣服が変わった。

「お家で楽々ショッピングってね」

ビシッとジャケットを整えたあと、再びデバイスに触れメニュー画面を表示した。

「お出かけは……渋谷にでもいこうかな」

外出＞渋谷をクリックすると、視界が歪み――…

「おー、ハチ公！」

一瞬で渋谷駅前に移動した。

スパムメールにご注意ください

渋谷に着いた澤真は丸鉄パイプの椅子に腰掛け、街の様子を眺めた。

本来なら車が並ぶ大きな国道を、徒歩の人々が自由に歩き回る。秋葉原の歩行者天国よりも盛大な”人の道”だ。だが、澤真はそこに違和感を覚えていた。

「なんだ……？ いつもより人が少くないか？」

普段は現実世界のスクランブル交差点、はたまた休日の池袋のように道路は人で溢れ、ごった返している。しかし今は数えきれる程ではないが一人ひとりの顔が見渡せるほど人の数が少なかった。

「今日リアルリアルランドのほうで何かあったっけ？ それともVEL内のどこかでイベントが……」

顎に手を当てて考えていると、駅の構内から小さな女の子が澤真のもとへ走ってきた。黄色い帽子に青色の園児服。女の子は澤真の前で足をとめ、踵を伸ばして澤真を見上げた。

「ん？ なにかな？」

思わず本物の幼稚園児に話しかけるような口調になってしまった。様子が幼いからといって幼女だとは限らない。VELは自分でアバター（容姿）を決めることが出来るのだ。大人が子どもにもなれるし、男が女にも、そしてブサメンがイケメンにも。

女の子はじつと澤真を見つめ、やがて小さな口を開いた。

「おてがみよんだ？」

「……………は？」

わけがわからず聞き返した澤真に、彼女は再び「お手紙、読んだ？」と尋ねた。

「手紙って……………ああ、そっいゃ届いてたな」

PCでログインする前、携帯のサイトのほうで手紙が届いていることに気付いたんだった。そういうば、衣装に気を取られて忘れてたな。

やれやれと思い、メニュー画面を起動する。ふと下を向くと女の子はもう居なかった。

自分の部屋ホームに帰ったのか？ 不思議な人だな……………
気にしないようにして、メール画面を開いた。

* * *

未読メールは二件だった。両方とも差出人は「VEL事務局」。

今朝早く、06:21に来てたメールの件名は

【重要なお知らせ：悪質なウイルスにご注意ください】

ついさっき、澤真がログインしたとほぼ同じ時刻、9:19のメールが

【お友達紹介ポイントの追加】

正直、友達を紹介した覚えはなかった。逸哉が俺のIDを盗んで勝手に？ いやいや、さっきの会話からしてそんなことないだろう。何気に【お友達紹介ポイント】のメールを開くと、『この度は、VELソフトをご友人に紹介頂き〜』というよくあるテンプレ本文と、『ポイント取得はこちらから』というリンクが表示されていた。

身に覚えはないが500ポイントは結構でかいし、貰えるものは貰っておこう。

カーソル移動で『ポイント取得』を押すと、“何か”のダウンロードが始まった。

* * *

ダウンロード、ディスクに保存。一連の動作が自動的に終わると急に世界が歪んだ。全体にモザイクがかかり、まるで違う世界に飛ばされるときみたいだった。

「なんだ、バグか？」

だがそれも束の間、モザイクは消えもとの風景に戻った。さっきと変わらない渋谷の街並み。違うと言えば、道路を歩く人々がさっきと別人だということ。

「一斉にホームに帰ったのか？」

本当に、今日はどうしたのだろう。気味の悪さを感じながらもポイントを確認。1320p、購入したジャケット分を差し引いても+500p。ちゃんと処理されてる。

こんな日は誰かに話しかけて友達でも作ろう。それがVELの醍

趣味の一つでもあるのだから。

そう思い、澤真は街に繰り出した。

* * *

よくある緑色のカフェに入ると、澤真はもともとVELの住人である（つまり機械）店員にブレンドコーヒーを頼み、一番奥の席に座った。

店内を見渡すとやはり人は少なく、両手で数えることができる程しかないかった。

やっぱおかしいな、日曜だったのに……

コーヒーを啜りながら客の数を数える。苦い豆の味が口の中に広がった。VELは仮想空間だから飲食が必要というわけではないのだが、味を楽しむことは出来る。現実^{リアル}の食べ物に比べたら劣るが、なかなか悪くはない。

最後の八人目を数え終わったところで、二番の番号を振った人物がふいに横を向いた。窓際の席に座ってる、黒髪の清楚そうな女性だ。店内の広告を眺めているのだろうその横顔は美しき大和撫子を連想させ、澤真は思わずコーヒーを飲み込んだ。雪のような白い肌、つばらな瞳、紅を塗った小さな唇。

澤真のタイプ、ど真ん中のストライクだった。

まだ誰も話し掛けてないよな……？

彼女の周りを確認し、メニュー画面から「会話ペット」を選ぶ。エンターを押すと足元に犬のキャラクターが現れ彼女のもとへ走っていった。

『こんにちは！』

会話ペットを使って彼女に話しかける。チャットのように、携帯に文字を打ち込むだけでペットが喋ってくれるのだ。直接話し掛けなくてもよいのだが、やはり面と向かうのは気恥ずかしさが残る。そんな意見で最近追加されたのがこの「会話ペット機能」。見た目の派手さに反して内気な俺はこの機能を活用していた。

彼女はきよろきよろ店内を見渡したあと、俺に気づかず会話ペットに話しかけた。

「こんにちは」

声色もドスとライク！

澤真は片手でコーヒーを啜り、もう片方の手をテーブルの下に隠し、iPhoneのような携帯端末を操作した。

『渋谷にはよく来るんですか？』

ありきたりな出始めだが、一番無難。彼女は微笑み、会話ペットの頭を撫でた。

「ええ、時々」

来るのか来ないのかいまいわからなかったが、仕草が上品なのでオーケー。

『俺はよくこのカフェにいるんだけど、初めて会いましたね♪』

♪を表現しようとして、会話ペットがきゅるんと鳴いた。

「あら、そうなの？　じゃあ、何度かすれ違ってるかもしれないね」

おお、好感触！

これは姿を現してもいいかもしれない。

『じゃあ、会話ペットなしの本当の姿で話し掛けていいですか？』
本当と言ってもアバターだが。『もしかしたら、わかるかもしれない』

唐突な俺の誘いに、彼女は少し困惑の色を見せたあと優しく微笑んだ。

「ええ、ぜひ」

よしてきた！

澤真は会話ペットを消し、携帯端末を胸ポケットに収めた。

コーヒークップ片手に立ち上がり、一歩足を踏み出そうとした瞬間、

「あれ……ログアウト出来ない」

隣にいた女子高生が呟いた。

悪質なクラッカー

* * *

『ログインしてる人間全員が閉じ込められる』

逸哉の言葉が頭に蘇った。いやいや、まさかだろ？ だってそんな……甘いセキュリティ——…逸哉はあの時、何て言っただけ？

「なにこれ、故障？」

「ふざけんなよ、昼からバイトなのに」

「事務局なにやってんの？」

参加者が一斉にデバイスを操作する。カーソル移動、ログアウト選択、クリック。

ダメだ、そんないつぺんにアクセスしたら回線がパンクする。あれだ、分かり易く言うと、一つのカッププリンにたくさんの人が一斉にスプーンを突っ込むだろ？ そしたら容量オーバー、余裕がなくなつてスプーン抜けなくなっちゃうだろ？ あんな感じ……と、逸哉がリアルプリンを食べながら教えてくれた。

恐る恐る、耳元のデバイスに触れてみた。ログアウトをエンター。

「……はは。いやいや、回線が混雑してるんだって。みんなが一斉にアクセスするからさ……」

そう言いながらも、カチカチとエンターを連打し続ける。クリック、最新の状態に更新、クリック、最新の状態に……

「マジ、ですか？」

故障だと文句を言う人がいた……というか、全員そう思って腹をたてているだけだったが俺一人、座り込んで最悪のケースを考えた。

* * *

苛立ちが不安に変わり、参加者たちが店内から飛び出して始めたころ。本来、自分自身が操作するはずのモニター画面が勝手に表示され、そこに中学生から高校生に上がる年齢ほどの少年が現れた。

『落ち着いてください、みなさん』

全員、目の前にあるモニターに見入る。中には、少年を事務局の者だと早合点して怒鳴りつけるやつもいた。

「ふざけんな、何が起きてんだよ！俺はネカフェからログインしてるから、出れないと延滞料大変なことになるだろ！」

「私も、昼から友達と会う約束してるの！」

気温がないからと言ってリアルではまだ冬の時期にタンクトップを着ているモヒカンの色黒男と、金髪巻き髪的女子高生が叫んだ。今のところ、騒ぎ立てているのはその二人だ。あとの人間は黙って様子を窺っている。

「だいたい、こんなバグが起きないようにすんのが事務局の仕事だろ？」

「そうよ、こっちはお客様なんだから」

よく言えたもんだな……俺ですら呆れ、いい加減煩わしいと思っていた時、モニターの少年が微笑んだ。

『煩いよ、おまえら』

途端、色黒男と女子高生の身体が光り、爆音を立てて破裂した。

「……………え？」

呆氣にとられたのは俺だけではない。その場にいた全員が目を見開いて炎を見つめた。

「きゃああああ！」

誰かの悲鳴を合図に、プレイヤーたちはモニターと反対方向に走り出した。しかし、個人のモニターを眺めていたため、全員の走る向きはバラバラだった。

「…………ダメだ、落ち着け」

小さな声で言ったが誰の耳にも届いていなかった。息を吸い込んだとき、四方八方から爆発音が聞こえてきた。

『煩いって、言ったじゃん？』

場にそぐわない、軽快な少年の声が渋谷に響いた。

* * *

幸い、肉片などは残らなかった。爆発した人間はシステムから綺麗に消されたみたいだ。

なす術なく立ち竦み、もう一度カーソルを動かした。「買い物」

コマンドをエンター。……やはりただのバグじゃないらしい、反応はなかった。

ふと顔をあげると、目の前にさっきの少年が立っていた。モニターが具現化したみたいに、身体を持って。

澤真はビクツと肩を震わせ、デバイスから手を離して少年を見つめた。

「ああ、最後にログインした人か」彼は薄ら笑い、澤真を見下ろす。
「不運だったね」

「最後？」

「三好澤真、二十歳。++大二年生」

澤真は思わず息を飲んだ。なんで個人情報漏れてる？

渋谷地区に残ったのは十数人だった。みな、静かに様子を窺っている。黒髪も女性も生き残っていた。

少年が興味をなくしたみたいに澤真から目を離し、駅側に数歩進んで全員から見える場所に立った。

「状況を教えよう。君たちはいま、ウイルスに犯されている」

一瞬で顔を青白くした人々が口元に手を当てて息をとめる。耳元のデバイスに触れたのは澤真だけだった。

「……一人か。渋谷地区に来る連中はバカが多いな」

嘲笑うように少年が言った。

「まあ、RPGで擬似冒険してるやつらは全滅だったけど」

* * *

泣きながら「助けてください」と懇願する人々。先ほどの惨状を見たからか、騒ぎ立てる人はいなかった。ある者は少年の目を盗んで力チ力チとデバイスのエンターボタンを押していた。そんな折り、一人の女性が立ち上がった。

「どういことですか、説明してください！」

勇気を振り絞ったように見える、それは澤真が話しかけた黒髪の女性だった。

「ウイルスって……いったいどんな病原菌ですか？ それに、ログアウトも出来ないしメニユーもいじれない。何が起こっているんですか？ あなたは事務局の人じゃないんですか？」

おいおいおい、見かけによらず強気な女だな……。ただ彼女は、俺たちが聞いたかったことを的確に質問してくれた。

少年は軽く唸り、溜め息混じりに答えた。

「まず、どう考えても事務局の人じゃないでしょ？」

「なっ……」

「で、病原菌？ ナンノハナシデスカー？ コンピュータウイルスのことだよ。まあ、つまり」

少年はニツと笑い、両手を広げた。

「ばら撒いたウイルスを使ってシステム、仮想体験型世界『VEL』に乗っ取った。サーバの管理者、つまりこの世界の神……」

パチパチっと、キーボードを叩く音が聞こえる。

「生かすも殺すも、ログインもログアウトも僕の自由、気分次第ってわけ」

全身から血の気が引いた。これならよっぽど、バグのほうの方が楽だった。

「なんでそんなこと……元の世界に戻してください！」

またしても勇敢に声を発したのは黒髪の女性だった。怖いもの知らずなのだろうか、臆することなく少年に質問をする。だが、強気な彼女の口を少年が塞いだ。

「出口はあるよ」

その言葉に、澤真たちは顔を上げる。

「制限時間は10日間……頑張って見つけなよ。まあ、生き延びれたらね」

希望のような絶望のような、よくわからないことを言った途端、少年の姿が消えた。

唐突すぎて意味がわからない、理解はおいつかないがつまり澤真含む何千人……いや、何万人だろうか。とにかく莫大な数の人間が『VEL』の中に閉じこめられてしまったらしい。

救世主なハッカー

少年が消えた、人々は思い出したように叫び始める。

なにこれ冗談じゃない、出してくれ、半ば狂ったように騒ぎ出口を探そうと走り出した。だがその足もすぐに止められる。

駅構内、そしてビルの合間から、野犬が飛び出してきた。低く唸り、人間たちを睨んでいる。

何を閃いたか、澤真は咄嗟に八チ公像を見た。悪い予感的中、八チ公は銅像姿のまま、片足を前に出し唸っていた。ワンと一鳴き、野犬の一匹が澤真の横にいた男に飛びかかった。不運、というしかない。襲われた男は抵抗すら出来ず、何匹もの野犬の犠牲になった。

「う……あ」

ホラー映画を見る時のよう、他人事みたいにその様子を見ていた澤真だが、野犬に襲われていたはずの男の姿が綺麗に消去されたところで目が覚めた。

次に襲われるのは自分かもしれない。

澤真だけでなく、場にいた全員がそう思っただろう。震える足を一歩後ろに上げた時、澤真は声を聞いた。

『案外大変なことになってんのな』

それはよく知った、親友の声だった。

* * *

澤真は咄嗟に耳元のデバイスに手をあてて音声を確かめた。

「逸哉……?」

『あ、ちゃんと聞こえてる?』

深刻な澤真の声をよそに、ナミシロイツヤ波城逸哉は愉快そうな声で答えた。

外部との繋がりが持てた! そね事實は澤真を安心させ、また混乱もさせた。

「お前どうして!? なんかよくわからないクラッカーみたいなのにVELのシステムをハッキングされて、ログアウトできない状態になったんだ」

『よくわかってるな。そう、VELこと仮想体験型世界は悪質なクラッカーに乗っ取られた』

システムに詳しい逸哉の口からそう聞くと、疑惑がより一層現実味が増して来た。

「でも、逸哉はどうやってVELに入ったんだよ?」

『ははっ、初歩的なこと聞いてんなあ。……ウィザード級なめんなよ』

気のせいかな、カタカタとキーボードを叩く音が聞こえてきた。コマンド入力、エンター、コマンド入力……

『っし、エンター! とりあえず、澤真。その街にいる住人を救え』

パンっというキー音と同時に、俺の身体が火を吹いた。

「えっ、ちょ……なんだこれ……」

『悪いな、澤真。少しお前の口を借りる』

「口？ は、えっ……ちょ……」

途端、声が出なくなった。口を動かしているつもりなのに言葉が出ない。その変わり、俺じゃない誰かが俺の喉を弄って喋り始めた。

「獣は古より火を恐れるという言い伝えがある。木々でも上着でも何でもいい、燃える物を野犬の大群に投げつける！」

どこのRPGの主人公だというほどくさいセリフだった。しかも火で獣を追い払えとか……

「逸哉、いくらなんでも単純すぎないか？ 獣に火とか原始的な……」

『大丈夫、そういう設定だ』

「は？」

だが、そうしている間にキャンという野犬の鳴き声が聞こえてきた。

何事かと振り向くと、黒髪の女性が羽織っていた上着に火をつけ、野犬の群に投げつけていた。

「まじかよ……藁にも縋るってか？」

『何もしないよりはマシだろ。ほら、澤真』

ヴンと、澤真の手元に炎を纏った剣が現れた。

『これなら格好もつくだろ。V E Lシステム全体がやられている今、お前がこの世界の救世主だ』

どんな仕組みか、どういう状況かはわからなかったが、澤真はと

りあえず剣を握った。

いま、頼りになるのは「外の世界」から指示をくれている逸哉だ
けなのだ。

勇者なプレイヤー

『とりあえずその剣で犬どもを追っ払っててくれ。俺は次の準備をする』

逸哉の声が言った。剣を手にしたまま立ち竝んでいた澤真は、はっと気がついて顔をあげた。

「次？」

『渋谷はまだマシな方だ。チラッと覗いたけど、RPGエリアは全滅……全員死んで強制ログアウトさせられてた』

「死……え、いやいや。ログアウト出来たんなら……」

『ああ、言い方がわるかった。VELのシステムから追い出された』

「……………ん？」

『ログアウトしたからって現実^{リアル}に戻れたわけじゃない。どこにも意識がないんだ』

「つまり……………」

『最悪の場合、一生寝たきり状態になる』

澤真は思わず剣を落としてしまった。そんなことになったら……

『RPGのやつら……………戦闘経験が豊富で武器を持ってる人間が居ない今、澤真だけがこの世界を救えるんだ』

ああ、そうか。だから最初にRPGエリアのやつがやられたのか……………

前を向くと野犬が一匹、澤真を睨んでいた。低く唸り、片足をあ

げてタイミングを図っている。

『行け、澤真！ お前にしか出来ない』

と同時に、野犬が澤真に飛びかかった。咄嗟に剣を拾い、それを突き出す。

「……は……はぁ」

野犬の腹を串刺しにした剣を掲げると、犬はキャンと一鳴きし頭を垂れた。

「つや……逸哉！」

『大丈夫、LPが0になった時点で自動的に消える』

逸哉の言葉どおり、剣先にいた犬がバシユツと姿を消した。ましまRPGの戦闘画面だ。

振り返り、後ろにいた野犬を二、三匹斬り捨てる。その向こうに、銅像のハチ公がいた。

「他と違う姿をしてるやつがボスって……相場は決まってる」

逃げようとするハチ公に向かい、炎の剣を振り下ろした。

侵入経路と最強となれる理由

* * *

澤真が斬りつけたハチ公が消えると野犬たちは一斉に退避した。バラバラの方向へ散らばり、渋谷エリアから姿を消す。

注意深く野犬たちの動きを追って剣を構えていた澤真だが、その必要はなかったらしい。

『ステージクリア。お疲れ、澤真』

そっけなく誉める逸哉の声が聞こえた。かと思うと、今度は澤真の前にヴンといくつものモニターが表示された。

『ちょっと待つてな、位置情報を特定してるから』

なる程、地図が表示されているモニターには「Now Loading」の文字があった。

「とりあえず渋谷はもう大丈夫なのか？」

『ああ。ハチ公像がボスだったから、あいつを倒せば終わりだった』

「あつけないな……それより、逸哉。ちゃんと説明してくれないか」

『は？ だから、VELが悪質なクラッカーに乗っ取られたって言うただろ？』

「そうじゃなくて……！ じゃなくて、何でお前がVELに来れたのか、と、俺にこんな力が……」

耳に逸哉のため息が聞こえた。説明が面倒なのだろう。もしかしたら、聞いてもわからないかもしれない。

『デバイスに侵入したんだ』

「……デバイス？」

『そう。澤真のデバイス。あ、言い忘れてたけど今澤真の部屋だから。勝手に上がらせてもらったから』

「ちょ……鍵は？」

『カード式だったんで簡単に開いた』

「……普通は開かないんだけどな」

詳しい説明を聞くと、どうやら現在クラッカーの手中に落ちているのは「VEL全体」そして「VELを開発した会社」の二つらしい。

『VELの構造を分かり易く言うと、

デバイス　　（電波？）　　開発会社　　（電波？）　　VEL

こういう形になってる』

「ん？ デバイスから直接VELにアクセスすんじゃないの？」

『違う。間に開発会社が入る。門番みたいなものだな。デバイス（ID）という通行書を見せることによって、開発会社がVELへ招待してくれる。個人が持つデバイスの情報を、一旦開発会社が集約するんだ。じゃないと、今誰がVELにログインしてるか管理出来なくなるだろ？』

「確かに」

『そして今回、クラッカーによって電波？の部分と電波？の部分がハッキングで乗っ取られた。デバイスと開発会社を繋ぐ道と、開発会社と仮想世界を繋ぐ道』

なるほど、などと頷きながら澤真は全く理解していなかった。そ

うだ、今度ヒマが出来たら「図解ページ」でも作ろうと思う。
そんなことを思いながらも、逸哉の説明は続く。

『だがラッキーなことに、クラッカーは個々のデバイスまで捉えてなかった。俺はそこを狙ったんだ』

つまり逸哉は、クラッカーに侵されている「VEL」と「開発会社」にはアクセスせず（手を出さず）、澤真のデバイス自体にハッキングし、VEL内にいる澤真だけ自由に動かせるようにしたという。

『個人情報がわかってるデバイスにハッキングすることは簡単だった』

「いや、でも。そんなこととして気づかれないのか？」

『それが……おかしなことにクラッカーの反応がないんだ』

「ん？」

『畏も張ってないし。荒らすだけ荒らして逃げていったみたいだ。』

もしくは……』

「もしくは？」

『姿を隠せるほど、凄い技術を持ったハッカーか……』

「えー！ それって逸哉より強いってことか？ やばくね？」

『まだ10日間あるんだ、大丈夫だろ』

「10日？ さっきのクラッカーもそういつてたけど、なんで……」

『何はともあれまず違う地区を救うかつ！』

逸哉は話を切り上げ、違う操作をした。モニターの画像が物凄い勢いで切り替わる。

『ここから一番近いのはローマかな』

「ロ……ローマ!？」

聞こえてきた言葉に反応し、澤真は大声を出した。逸哉は気にすることなく作業を続ける。

『システム上、な。現実^{リアル}ではかなり離れてるけど、VEL内では目と鼻の先だ。脚力レベルをあげる。時速百キロ、頑張つて走れ！』

「走……はあ!？」

『目と鼻の先つて言つただろ』

地図を表示するモニターを見ると、「ローマ」と書かれた場所が点滅していた。

『渋谷からローマまでの道を表示する』

「ちょ……走るつてマジでか!」

『大丈夫、俺が操作して澤真の脚力は最大になってるから』

「そういう問題じゃない! ローマまで走るなんて……」

『ごちゃごちゃ言つな。さ、行く……』

「待つてください!」

逸哉がエンターを押して澤真を走らせようとした時、麗しい女性の声が渋谷に響いた。

侵入経路と最強となれる理由（後書き）

チープというか、やっすい解説ですみません

図解はあるんですが、落書きすぎて公開できない＆撮影が苦手で。

ではでは。

感想やら間違いがあつたら指摘ください。

エロ要員はいやらしいから性的要員とかうんたらかんたら

「あ、さっきの……」

澤真を引き止めたのは、またしても黒髪の女性だった。乱れた髪の毛を耳にかけ、澤真を見つめる。

「ローマに、行くんですか？」

「え？」

「今みたいに、他の人を助けにいくんですか？」

どこから聞いていたんだろう。彼女はじつと澤真を見つめ、歩み寄ってきた。

「逸哉、お前の声は俺にしか聞こえないんだろ？　なんであの人、ローマって……」

『いや、俺の声はお前にしか聞こえないが……澤真の声は、みんなに聞こえてるぞ？』

「……………え？」

あ、確かに、そりゃそうだ。と思うと同時に、自分がどれだけ大声で喋っていたかを思い出した。

「うわ、俺恥ずかし。完全に独り言じゃん！」「なにを今さら……………」

「あ、逸哉てめっ。今鼻で笑ったろ？」

「腕……………」

逸哉に話しかける体で独り言のように喋っていると、黒髪の女性が澤真の腕を掴んだ。

「えっ、なに？ なに？」

女性に触れられるのは高校の調理実習で包丁を奪い取られた時以来だった。「いや、ホントに。野菜無駄にしたいから止めて」と澤真は切る係から洗い物係に移動した。その時、指先が触れた時以来……

動揺して目をきよろきよろさせていると、黒髪の女性は小さなポーチの中から絆創膏を取り出した。

「怪我してます」

器用に袋を開き、彼女は澤真の手のひらに絆創膏を貼った。よく見ると、確かに親指の付け根に小さい傷があった。

「気をつけてください」

微笑まれ、澤真の顔は一気に熱を持った。

「い、いや……あの、俺は……」

「待ってますから」

彼女は澤真の腕を掴み、鼻先が胸に付くんじやないかと思うほど顔を近づけた。上目遣いで澤真を見つめる。

「私、ここで待ってますから。頑張ってきてください」

彼女の指が澤真に絡む。手のひらが擦れると、それだけで意識が

飛びそうだった。細い指、小さな手。少し冷たいけど柔らかみのある弾力。

「が……頑張つてきます!」

手が汗ばんできたところで、澤真は彼女の指を振り解き走り出した。

『あ、バカ。澤真、道違う』

「道なんかどうでもいい! 俺はいまマジでやばい!」
『やばい?』

さすが時速百キロ。振り返っても、渋谷の町は既に見えなかった。

「俺はいま……性的興奮を……」

『そっち（言葉を濁した）のほうがよっぽどエロいよ』

気のせいだと思うが、逸哉に頭を叩かれた気がした。

工口要員はいやらしいから性的要員とかうんたらかんたら（後書き）

後日談

逸『お前、ちよつと手が触れただけで女子に触られたとかどうこう思ってたの？ え、キモい』

澤「免疫がないんだから仕方ないだろ！ つーか人の心の声を勝手によむな！！」

逸『つか、タイトルからしてどうなのこれ？』

澤「そんなことより俺は、逸哉と俺の関係を「大学のサークルで知り合った」にしたことを後悔してる！ 最初は幼なじみにしようかと思ったけど、裏で連載終わってる悠闘記と被るし、作者がITに目覚めた某BM漫画とも被る」

逸『どうでもいいし、不満なら変えようか？ 設定』

澤「え？」

逸『俺と澤真を幼なじみに設定し直せばいいんだろ？ ついでに、義理の妹でも作っとく？ もちろん、呼び方は「お兄ちゃん」』

澤「いや、ちょ……夢のようだが遠慮する！ 俺が俺じゃなくなる気がする」

逸『そんな必死にならなくても、システムには限界があるし。俺そこまで出来ないし』

ちなみに黒髪の女性を仲間にするつもりはなく、一番最初の犠牲者になる予定でした。

ヒロイン三人？　たいした問題じゃない。
行き当たりばったりですみません！

牧場にて

* * *

「なあ、逸哉。俺はローマに行くんじゃないかったのか？」

だだっ広い牧場を見渡しながら澤真が言った。山に囲まれた平野に緑豊かな芝生が生え、雲一つない晴れ空から太陽が照らす。一メートル弱の低い柵の内側外側両方に牛の群れ、牧場のあちこちで燃え盛る炎を見て興奮している様子である。

『澤真が暴走するからだろ。お前はいま、牧場エリアにいる』

「見ればわかるよ、そんなこと」

炎を眺めながら澤真はため息をついた。走っていると急に景色が変わり、目の前に緑が広がった。渋谷く牧場の境界線を跨いだらしい。確かに、現実では有り得ないことだ。

そして、

「助けてください。うちのハナコが……」

もともと人気のない牧場エリア。そこに居たのは白髭を生やした牧場領主のようなおじさんだった。最初、VELの住人（機械）かと思ったが、耳にデバイスを付けていたことと異常なまでの慌てぶりから外の世界からきた参加者であると判断した。渋谷にしてもそうだったが、VELの先住民は動揺する様子一つ見せず落ち着き払っている。

ハナコって誰だよと思うが、まあだいたい想像がつくよう、あそこで暴れ回っている牛の中の一頭である。

「急に火がついて、そしたら牛が暴れだして……」

とまあ、そんな感じ。「ローマは？」とツツコミたかったが、逸哉に言ってもバカにされるだけだし、助けを求めてくるおじさんに聞くのも見当違いだ。

「とりあえず、火を消せばいいのか」

格好だけ整え、渋谷で使った剣を掲げた。よく見ればすっかりした剣だった。刃は銀色に輝き、大男の足ほど大きい重さは感じさせない。柄の部分は金でコーティングされ、刃と柄の境目には水晶のような玉が埋め込まれていた。

『水使う?』

逸哉が言うと同時に、剣の玉が水色に変わる。なるほど、使用する術の属性によって色が変化するらしい。

『ついでだから、他に何か欲しい装備があれば言ってみるよ』

キーボードを打つ片手間に言われ、澤真は「勇者」に必要なものを考えた。

「じゃあ、盾と兜」

自分でも安易な想像だと思ったが、

『盾と兜? いやいや、小学生向けのゲームじゃないんだからさ』

逸哉にも同じことを言われた。

「じゃあ逸哉が考えてみるよ。今の俺に何が必要か」

半ばキレ気味に言うと、逸哉は『あたま、つーか賢さ』と即答した。

「お前……」

『まあ、冗談はおいといて例えばな』

逸哉の言葉が終わらないうちに澤真の腕と足がヴンとモザイクに包まれた。

「……おお」

モザイクが消えると腕にはシルバーのブレスレット、足には羽の生えた革靴が装着されていた。

『こんなもんかな。つーか俺は「外装」より「性質」を作る立場だからさ。いや、うん。説明しにくい』

逸哉の言葉は投げやりだった。『とにかく、欲しい機能とか、やりたいことがあれば口に出して俺に伝えてくれ』

なんだ、それだけでいいのか。言葉よりずっと心強かった。

「まずは、火を消してここを落ち着かせたい」

さっそく要望を言うと、逸哉は快く承諾した。

『了解、水と——とりあえず剣を一振りしてくれ』

指示に従い剣を軽く振るうと瞬間、天から雨が落ちて牧場を濡らした。晴れ空に大雨、一瞬にして火が消え牛たちもびっくりして動きを止める。

「ちょ……一振りだぞ?」

『あっけなすぎた? ごめんごめん』

そういう逸哉の声はどこか楽しそうだった。澤真はため息をつき、剣を地面に下ろす。

「なんかなあ……これじゃあ俺が救世主というより、逸哉が凄いだけじゃね?」

雨が止んだ空に向かって言うと、逸哉のしたり顔が浮かびあがった。

『魔法使いつてのは、陰から勇者を支えるもんなんだ。俺は表舞台なんかまっぴらごめんだしな』

魔法使いといっても、スティック片手に呪文を唱えるそれじゃなくて、その業界では本物のウィザード。

そもそも誰がそんな危険な世界に行くかと、パソコンの前の逸哉が生意気そうに舌を出して言った。

道中で、

「ありがとう！」と激励を受け、澤真は牧場おじさんに強い握手と包容を求められた。

いやいや、正直ムリ。苦笑いしながらやんわりと拒んだが、それを謙遜と勘違いしたおじさんは更に感激する。

時間がないんです、他の場所にも行かないと！

なんとか説得し、牧場を抜けることが出来た。時速百キロ、再び足を走らせ次の場所へ向かう。

『そつえばさ、澤真』

道中で、ふと逸哉が言った。

『その顔好き？』

「……………は？」

意味のわからない質問に一旦足を止めると、『いや、走りながら会話してくれ。無理なら話しかけない』と言われたので足は動かすことにした。

「いきなり何聞いてんだよ」

『あー、うん。顔変えたくないなら、澤真の顔に仮面つけといていいか？』

「話が右往左往し過ぎだよ。つか、顔変えるとか仮面とか、なんの

ために？」

『だって澤真、しばらくVELで生活することになるだろ？ 顔が割れてたら不便かなと思って』

「不便はないだろ。俺はこの世界を救う勇者様だぞ？」

『自分で”様”付けてる勇者もどうなんだろうな。いいや、不便だよ。俺もお前も』

ため息をつきながら逸哉が言った。うーん、と軽く唸り話を続ける。

『例えばさ、お前が勇者ともてはやされてる時にこの事件の発端となったクラッカーが現れたらどうする？』

「どうするって……戦う？」

『はい、不正解。そうじゃなくて、答えは様子を見る。だよ』

逸哉の声は呆れるというよりは、捻りのある謎かけにひっかかった子どもをからかうような口調だった。

「様子を見る？ 戦わないのか？」

『あのさ、澤真。簡単に戦うとか言ってるけど、クラッカーと戦うのは俺なんだよ？』

確かにそうだ、と澤真は足を止めないまま頷いた。

『現状はさ、残念なことに相手の情報何一つ掴めてないんだ。だから、もしかたクラッカーが何かしかけてきた時は、傍観者として様子をみたい』

「なる程な。確かに、アバターが少年の姿だってことしかわからなかったもんな」

『……………アバターが少年？』

逸哉の声がキーンと頭に響いた。澤真は顔をしかめ、宙を睨む。

「なんだよ、どうした？」

『いや……え？　なんで澤真、クラッカーのアバターが少年って知ってんの？』

「は？　だって、渋谷に現れたじゃん。そいつ。ああ、そーいや逸哉が来る前だったな」

少しの間沈黙が続いたが、すぐに逸哉の裏返った叫び声が聞こえた。

「だから、煩いって」

『いやいやいや、なに……クラッカー、現れたの？』

「そうだけど？」

『IP……アドレスはとった！？』

「アドレス？　IP？」

『訳わからなそうな顔すんな！』

バシーンと頭を叩かれた気がした。いや、もしかしたらこいつ、^{リアル}現実で俺の頭叩いてんじゃないか？

どうやら、逸哉とそのクラッカーは行き違いになったらしい。クラッカーがVELにアクセスしている時に自分が居れば、何か掴めたかもしれないのに。いやでも、逆にこっちの個人情報も盗まれてたかも……と、逸哉が独り言を言っているうちに澤真は牧場エリアの境界線を抜けた。

独り言をいうならマイクを抜いて欲しいとため息をついて下を向いていた澤真は、雄大な景色に思わず顔を上げた。煉瓦づくりの建物、風格のある街並み、威厳のある先住民——VELで一番人気を誇る、ローマエリアだ。

ローマエリア

街が近づくに連れ見えてきたのは、何人かの兵隊だった。澤真は思わず息を飲む。

「おいおい、マジかよ……」

『だから言っただろ。ローマが一番やばいって』

風情ある街並み、ローマエリアに遊びにくるアバターたちもどこかオシャレで”憧れの街”そのもの……のはずだった。

澤真が目にしたのは、澤真のより小振りな剣を振り回す鎧の兵隊と、彼らに斬りつけられ道端に倒れ込んでいる人々、その血の海だった。「うっ……」と小さく唸り、助けを求めようと手を伸ばす若者のアバター。その腕を、一体の兵隊が剣で串刺しにした。若者は掠れた声で悲鳴をあげ、咄嗟に手を引っ込めようとした。だが剣は深い、若者がもがけばもがくほど皮膚が抉れ血が滴った。いつそ、殺されたほうがいいんじゃないか。とも思ったが、VEL内での死は現実での意識不明重態だということを思い出した。VELを抜けたからといって助かる見込みはない、むしろ危険。

兵隊はもう一度剣を深く差したあと、手品のように新しい剣を出して別のアバターたちを追う。

ふいに、路地裏から女の子が姿を現した。

「うそ、真っ直ぐ逃げてたはずなのに……」

青ざめた顔をし、女の子が来た道を走って戻る。「無駄なことを」と兵隊が嘲笑った気がした。その通り、VELは小さな地球みたいなもの。ただ走るだけじゃ、そのエリアからは抜け出せない、なに

か特殊な方法を見つけないと――…

「きゃっ」と小さな悲鳴がして、女の子が別の路地からこの場所へ戻ってきた。拉致が明かない鬼ごっこ。痺れを切らせた兵隊たちが束になって彼女に切りかかろうとした。

殺すつもりなのか、それとも他のアバターと同じように生き地獄を味わわせるつもりなのか。どちらにしても――…

『死なせちゃダメだ。助ける、澤真』

逸哉に言われる前に、身体は既に動いていた。

* * *

ギリギリ、間に合ったのか？

澤真は片膝をつき、腕の中にいる少女を見た。微かに震えている、当然だ。

剣を掲げている右の手首に力を入れ振り上げると、澤真に刃を突きつけていた兵隊たちが仰け反った。ゆっくりと少女をおろし、剣を構えた姿勢で兵隊たちのほうへ向き直る。

澤真の剣は水晶が銀に光り、刃の部分から蒸気が立っていた。

「……なんだ？」

兵隊たちを睨んでいるうちに、澤真は妙な違和感に気がついた。この兵隊たち、生気がないというか、人間ぽくない……いや、違う

…

考えているうちに兵隊の一体が澤真に襲いかかってきた。一か八か、いや、それは俺が決めていいことじゃない。

「間違つてたら笑ってくれ。逸哉、こいつら……中身がない？」

澤真の質問に、逸哉は笑わず答えた。

『ああ、正解。形だけだよ。切りつけたら骨みたいにガラガラ崩れる』

「なるほど」

そのあとの会話はなかった、言われなくてもわかったのだ。

澤真は後ろにいる女の子に逃げると目で合図を送り、再び兵隊を睨んだ。ああ、でも、そういえば、仮面を被ってたんだった。どんな顔かは知らないが、本当の表情は理解して貰えなかっただろうな。

まあいいやと、剣の切っ先を敵の群れに向ける。澤真の口元は、微かに口角が上がっていた。

ローマエリア（２）救世主

突如現れた金髪仮面の男。わけがわからず戸惑いを見せていたローマエリアの人々だが、誰の合図を最初にか歓喜の聲が飛ぶようになった。金の柄に銀の刃、縁には七色に輝く水晶のある剣を掲げ、時に羽を生やして空を飛び、時に火花を散らして雷を落とす。そうやって次々と敵を倒していく姿は、勇者というか救世主そのものだった。

兵隊の中身が空だとわかりため息をつく者が多数だったが、だからといって反撃してやろう、なんて人間はいなかった。そんな必要はなかった、と言ったほうがいいのかもしれない。隠れていた人たちも表に出てきて、中には救世主の活躍をより近くでみようと寄ってくる者たちもいる。それは救世主様に対する憧れでもあったし、信頼でもあった。

彼についていけば自分は助かる――誰もが”最初は”、そう思っていた。

* * *

「やっべ、これ。ちょーきもちー」

身体を感じたことを、澤真はそのまま口に出してしまっていた。中身のない兵隊に向け剣を突き出すと百発百中、切っ先はそれらの胴体または頭にぶつかり鎧が崩れ落ちては消えて行く。風のように街中を切り抜け、もう百体くらいは倒したか、キリがないな……と思っていたやさき、最後の一体と思われる兵隊が自らの剣を落とし、地面に崩れ落ちた。

ステージクリアか、と思って空を見ると、遠くに黒い霞が見えた。

最初、虫の大群かと思われたそれは徐々に大きくなり、街上空に來たとき初めて翼竜の群れだとわかった。陸地を歩く兵隊よりも素早い、翼竜の一匹が澤真から離れた場所に倒れていた男のアバターを前足で掴んだ。

「なんだ……助け……」

慌てて引き戻し、翼竜が上昇を始める前にその身体を真つ二つに引き裂いた。真上から血を浴びた男のアバターを抱え、地面に着地する。

「間に合った……」

安堵の息を漏らし、啞然と突っ立っているギャラリーたちに向かって叫ぶ。

「怪我して動けない奴を連れて、建物の中へ隠れてろ！」

抱えていた男を、ギャラリーの中へ放り投げる。胸板の厚い筋肉質男が彼を受け止めた。

澤真の声で目を覚まし、人々は一斉に建物の中に隠れる。幸い、何人かの善人が道端にうずくまっている重傷人を抱えて逃げていた。良かった……出来れば俺の前では、一人の犠牲も出たくない。

「……逸哉、必要なもの、決まった」

逃げるアバターたちを横目に、正面にはぎゃあきゃああと泣き喚く翼竜の群れ。澤真が言つと、逸哉は少し考えたあと「ああ」と漏らした。

『なに？』

「あいつらに対抗……空を飛ぶ、翼が欲しい」

口だけ動かして言うと、逸哉は感心したように小さく笑った。

『だいたい正解。でもどうせなら——』

途端、ふわっと身体が宙に浮いた。

「うわ、なに……」

『あいつらより、大きい翼のほうがいいだろ？』

澤真の背中には翼竜より少し大きめの翼が生えていた。

「さっすが逸哉、気が利くー」

『別に誉められるようなことじゃないし、嬉しくもないし』

つんとした逸哉の声は、本当に興味がなさそうだった。

『それより操縦方法を教える。ちょっと実践してみてくれ』

「えっ、俺が操縦すんの、この羽」

『自動操縦にもなるけど……いいの？ 自分で動かしたほうが楽しくね？』

確かに。と澤真は何も言わず頷き、逸哉の言葉を待った。

『まず澤真の身体つーかVEL内^①のその姿はデバイスにリンクしてて、そもそも翼がある、空を飛ぶという行為自体がデバイスから脳に……』

「え？ いやいや、そこから説明？ 聞いてもわかんないだろうか

「さ、操縦だけ教えてくれよ」

遠慮なしにそう言うと、逸哉のため息が聞こえてきた。

『まあ、別に。澤真がこういうことに興味ないの知ってるけどさ』

水晶で羽の力と方向を調整する。翼がある状態のときに指で水晶を押さえると飛行が始まり、水晶を左に弾くと左回転、右も同じく、簡単な説明をしたあとで、逸哉は「話が通じない澤真より、早くクッカードに会ってみたい」と暴言を吐いた。

「とにかく！ 今は一人でも多くの人を助けるんだろ」

剣を握り締めながら言うと、「ああ、それがVELから脱出できる唯一の道かもしれない。……頼む、澤真」いつになく真剣な声で逸哉が言った。

ローマエリア（3）～飛行術と事の原理～

飛行術は案外簡単だった。水晶を強く押さえると翼が広がり自然と宙に浮く、指で左右に移動。RPGの飛行竜を操作すると同じ要領で空を飛ぶことが出来た。

宙に浮いた状態で水晶から手を離すと自動操縦オートに切り替わり、攻撃が出来る。

上空の、一番高い位置から下降とともに剣を下ろし翼竜を串刺しにするのが一番気持ちよかった。ギイイと気持ち悪い声をあげ、突き刺された翼竜がうなだれ消えて行く。いち、に、さん匹……数える間もなく澤真は翼竜を倒していった。

「でもさ、キリがなくなね？」

澤真が言つと、逸哉も同意するように低く唸った。

『確かに、まとめて全部倒せることが出来れば楽だな』

「まとめて全部……そうだ逸哉、雷だ！」

『雷？』

「俺に雷を操る機能をつけてくれ。稲妻を起こして、一気に片を付ける！」

ぶんぶんと剣を振り回してリクエストする澤真に、逸哉はため息をついた。

『エンドユーザは知識ないが故に変な注文つけてくるから嫌なんだ』
「なんだよ、無理なの？」

『“雷を操る機能”は無理だな。そもそも雷っていうのは実体があ

るものじゃなく、現象のことを言うんだ。雲と雲の間に電気を起こす放電現象のこと」

「……………ん？」

『放射能で例えられる「蛍の光」と一緒だよ。放射能⇨蛍が光を発する現象、放射性物質⇨光そのものってテレビで言ってたろ？ その要領で、雷⇨蛍が光を発する現象、電気⇨光そのもの。「雷が落ちる」ってよく言うけどさ、厳密に言えば使い方間違ってる。これは俺の予測なんだけど、「落雷」からきた慣用句に過ぎないと思うんだ』

蛍の光？ 初耳だ、と思いながら澤真は黙って逸哉の話聞いていた。つーか、こいつ、理系じゃなかったっけ？ 慣用句やら何やら、何でこんなに詳しいんだ？

『それでさ、澤真……聞いてる？』

「いや、半分は聞き流した」

『お前……まあいいや。で、雷などの自然現象はVELに内蔵されているオプションだ。さっき言ったら、俺がいじれるのは澤真っていうアバターだけで、VELのシステムには手を出せない』

「えっと……………つまり？」

『つまり、操るんじゃなくて誘導してやればいいんだ。澤真、剣を真上に突き出せ』

わけがわからない、と思いながらも澤真は剣を掲げる。水晶がチカチカ、黄色に点滅していた。

『用は雷を起こせばいいんだろ？』

「だから、それが雷を操るってことだろ？」

『違うな。澤真が操るのは……………』

逸哉の言葉を聞きながら、澤真は剣を握っている右手が少し痺れてきたことに気がついた。まさか――…

『発想の転換、ルートがなけりや、作り出せばいい』

その瞬間、バチッと剣が瞬いた。

「雷？」

『いや、ただの電気だ。電圧、澤真の体内水分量そして熱を調整して……雷の成分である氷を作る』

バリバリッと激しい音が立ち、澤真の持っている剣に雷が落ちた。

「うわつ、ちょ……感電する！」

『おーちーつけ。大丈夫、いまお前の身体は電気を通す誘導体となっている。そんでな、』

説明が面倒になったのか、逸哉は澤真の許可なしにエンターキーを押した。澤真の意思とは関係なしに、剣が大きく振るわれる。

次の瞬間、剣に流れていた電気と雷光が街中に散りばめられた。澤真の視野にいたもの、建物そして翼竜たちに稲妻が降り注ぐ。

『操るのは無理だけどさ、雷現象を起こすことは出来る。ちよつと荒いけどな』

実際、荒いどころの問題じゃなかった。落雷は翼竜だけでなく、他の人々が避難していた建物にも直撃した。幸い、外に出ている者がいなかったから良かったものの……

「いや、もしかして逸哉、そこまでよんでた？」

『ん、何が？』

「無差別な雷だけど、他の人には当たらないだろうって」

『何いってんの、当たり前じゃん。VELから脱出するにはさ、より多くの人の協力が必要なんだよ。むざむざ死なせてたまるか』

当然、というような逸哉の言葉に澤真はため息をついた。たぶんこいつには一生叶わないと思った。そしてVELにいる全ての人間の命が逸哉一人の手中にあることも。でも、それならもし、逸哉が俺を見捨てたら。いや、それ以上に裏切ったら……

考えないようにしようと頭を振り、澤真は地面に落下する翼竜たちを眺めた。

厄介な救世主様

逸哉が言ってた、『顔を知られないほうがいい』ローマで暴れまわって初めて、澤真はその意味を理解した。

「あんた、VEL事務局の人間だろ。一体何が起きてるんだ」

「友達と約束してんだよ、早くログアウトさせてくれ！」

「黙ってないで何とか言いなさいよ！」

翼竜を倒してステージクリア。『余計なことしないほうがいいぞ』という逸哉の助言を無視し、澤真は仮面の下にへらへらした笑顔を浮かべながら避難してたアバターたちに近づいた。しかし感謝されるどころか、人々は口々に澤真を責め立てた。あらゆることから苦情が飛ぶので、もう何が何だかわからない。

なんとか応えようとするも、澤真自身、どう説明すればいいのかわからなかった。

「えーっと、あの……」

数刻前の渋谷エリアが懐かしい。なんていい人たちだったんだ、あの人たち。黒髪の女性も……

「仮面なんか被りやがって。素顔を晒せ、この……」

ボーッと彼女ののことを考えていると、苛立ちが限界に達した男性がふいに澤真の仮面に触れた。

まずい、顔は——気に入ってるから変えたくないんだ。腕を交わし、逃げようとした時、

『脚力状態万全。太陽の見える方向に走れ、澤真』

ずっと黙っていた逸哉の声が聞こえた。

太陽——その位置を確認し、澤真は飛び跳ねるように人々の合間を抜け、全速力で走り出した。

『だから言っただろ、余計なことすんなって』

逸哉が言った。澤真は必死に足を動かしながら応える。

「いやいやいや、つか何で！？俺、あの人たち助けたんだぞ。救世主だぞ」

『まあ、その時はな。人間てのはおかしなものでさ、盛り上がった時はわけがわからず目の前の事実を信じるんだけど、冷静になるとまず信じてたものを疑っちゃうんだよな』

「だからって、なんで俺を……」

『一番怪しいじゃん。ログアウトも他の操作も出来ない状況で、なぜこいつだけあんな力が使えるんだって』

「……確かに」

澤真は先ほどの喧騒を思い出し、もう何度目かのため息をついた。

「なんかなあ。あっさり最強の救世主様！になれると思ってたのに」

『人の好意を受けるには努力が必須なんだよ』

「まあ、そうだよな」

『落ち込むなって。まだ終わったわけじゃないんだから。さ、次の街行こうぜ救世主様』

嫌みたっぷり逸哉が言った。もう、なるようになれ！ 澤真は顔をあげ、ただ無心に走った。境界線を抜けると、別のエリアだ。

フェレットな相棒と閉幕が始まり

「はーあああ。終わった……」

真下に突き刺した剣を杖代わりにし、澤真は地面に崩れ落ちた。ローマから始まり中国、京都、沖縄。VELに存在するエリアを全て回り、最後の「宇宙エリア」でエイリアンを倒した時、逸哉の『お疲れー』という声でゲーム終了と理解した。長かった、時間にしてどれくらいか、日が暮れ始めていた。

「つか、最後の……」「宇宙エリアに入るには宇宙服を購入してください」ってアナウンス……。バカにしてんなよ、俺は救世主様だぞ」『はいはい、ご苦労さま。ていうか、宇宙服なら俺が作ってやる？』

「疲れた、精神的に……疲れた」

溜め込んで言うと、もう逸哉の返事はなかった。

『とりあえず緊急はこれで終わりだから』

「終わり、か。……これからどうすんの？」

『あー、とりあえずVELを歩きながら様子をみようか。今日併せて十日はあるしな』

聞こえてきた言葉に、澤真はピクツと眉を動かせた。十日——さつきも言ってた。

「なあ、逸哉。さつきも気になったんだけど、十日ってなに？」

その質問に、逸哉は「はあ？」と不可解そうな声を出した。

『なに言ってるの、澤真。え、もしかして利用規約読んでない？』

「登録は無料だけど、一部有料コンテンツがあります。的などとはしっかり読んだ」

『そこじゃなくてさ……赤文字で書いてただろ。VELに滞在できる、最大制限時間』

さいだいせいげんじかん？

澤真は宙を睨み、読んだはずの「利用規約」の内容を思い出してみた。

「あ、あれか。五時間以上の連続使用はお控えくださいってやつ」

『あー、それそれそんな感じ。普通のゲームと一緒にだよ、画面見すぎると目が悪くなる。まあ、VELの場合、脳を使うから頭が悪くなるけどな』

「笑えないな、それ。でも、利用規約は「五時間」で、十日なんてどこにも書いてなかった気がするんだけど？」

『あ、ごめん。十日は開発会社が社外秘で設定してる”生命に関わる絶対時間”だった』

「……………え？」

とりあえず、つつこみたいところはたくさんある。けど何をどう聞いていいかわからず、澤真は口をパクパクさせていた。

『だから、わけわかんないような顔すんなって』

「いやいや、だって……えっと、まず、逸哉が社外秘の情報を知ってるのもおかしいし」

『クラッカーに支配される前、開発会社にハッキングして見ておい

「たんだ。常識だろ？」

「いや、悪いが俺が住む世界にそんな常識はない」

「なんだ、その言いぐさ。失礼な」

「それと……え、なに？ 命に関わる絶対時間？」

「その時間を超えると、現実^{リアル}にある身体が死亡状態になるってことだよ」

へろつと逸哉が、簡単に言った。

「当たり前だろ。VELに行くってことは強制的に昏睡状態にさせるわけだし。テストを重ねたデバイスだって二百時間以上耐えられるように作ってるわけじゃない。そもそも、十日間も寝たきり状態で生命維持なんて出来ないだろ。それらも考慮して、参加者がログインして二十四時間経ったら自動的にログアウトする仕組みになってたみたいけどソースコードごと書き換えられ……ておい、澤真。聞いてる？」

頭の中にはペラペラと難しいことを語る逸哉の声。澤真はハッと顔をあげ、前を見た。広い高原にポツンと木が一つ、その下にフェレットが立っていた。

「ていうわけでさ、制限時間は十日。俺たちは十日以内にVELを封鎖したクラッカーを捕まえて、ここから抜け出さなきゃいけないんだ」

説明を聞きながら、澤真は遠くにいるフェレットを眺めていた。
なんだ、あいつ……VEL先住、オプションのペット？ それにしては動きが普遍的だし、何かおかしい……

「その前に澤真、お前に新しい仲間を紹介しておく」

ピンと片手をあげたフェレットが、前脚をかいて澤真のそばに近寄ってきた。

『仲間というか……俺だけだな』

澤真の首にすっぱり巻き付けるくらいの、可愛いフェレットがもう一度ピンと腕をあげ、口を開いた。

「微妙な場所からハッキングすることに成功した。声と会話してるだけじゃ味気ないと思って、こういう格好にしてみた。普通にイツヤと読んでくれ、よろしくなタクマ」

フェレットのくせに流暢な喋り方。逸哉の声の獣が、表情を変えないまま片手をあげて挨拶をした。

「ちょ……マジ、意味わかんね」

『ああ、安心しろ。俺は現実、^{リアル}外の世界からこの生き物^{アバター}を動かしてるだけで、VELにはログインしてないから』

そんなことどうでもいい、聞いてない。などの文句は言えず、澤真は痛い頭を抑えて地面に崩れた。

『落ち込んでる暇ないぞ、澤真。とりあえずそのウザったい金髪を黒に染め直すからな。しかも何だその顔は。^{アバター}リアルと全然違うじゃないか』

腕組みをしたフェレットがぶんすか怒る。自分を含め可笑しな光景に、澤真は苦笑いするしかなかった。

VEL滞在一日目。

これはまだ序盤に過ぎない。ある日突然起きた、世界を揺るがす大事件の始まりそして――勇敢な救世主、魔法使いなハッカー、その仲間たちと、悪質なクラッカーとの十日間の物語。

フェレットな相棒と閉幕が始まり（後書き）

一幕終了。

夕方にきてお気に入りが9件！とか思ってたら、二時間後には2件減っていました

かなりダウン（メンタル）

でもこんなに評価を入れてもらえてる作品は他にないので嬉しいです！

夕方の更新は文字数少なくてすみません。
日にちを開けて、第二幕いきます。
今後ともよろしく願います。

解体報告：一日目、波城逸哉（前書き）

第二幕開始

VEL封鎖 二日目

渋谷エリア

解体報告：一日目／波城逸哉

「現在、ご利用出来ない状況になっております」

VELの通常ログイン画面を眺め、逸哉は何杯目かのコーヒーを飲み干した。時刻は深夜一時半、VELがクラッカーに乗っ取られたのは昨日午前九時半前。逸哉が事件を知って澤真の部屋に駆けつけたのが十時前。運がよかったと思う。直前に澤真とVELシステムの危険性について話していたせいで、ふと気になってアクセスしてみた。

違和感……コードが大幅に書き換えられてる？

その瞬間、嫌な予感が頭を過ぎった。まさか……いやいや、まさか。

そのまさか。逸哉は自分のノートパソコンを抱え、家を飛び出した。電話は通じない、部屋の鍵は簡単に開いた。

澤真をベッドに避難させ、パソコンを見た。

「ダメだ。完全にやりやがった」

パソコンの画面にはプログラム言語がちらちら……

「C++とJava……Perlも使ってたのか、なんだこいつ」

澤真がログイン中なのが不幸中の幸い、うまくハッキングできればVELの様子を知ることが出来る。震える指を抑え、キーボードを叩いた。

姿の見えないクラッカーに真つ正面からぶつかってもダメだ。V
ELの構築システムは完全に敵の手中。完全閉鎖、中が見えない壁
の内側を知るには――…

「ラッキー。澤真のデバイスなら操作できる」

VELの構造は先日話した通り、《VEL世界》（電波）―開発
会社―（電波）―デバイス（プレイヤー）―となっている。VEL世
界に行くには本来、開発会社を経由するが、その道はクラッカーに
監視されている。

「だったら、開発会社を通さなけりゃいいんだ」

逸哉のモデルは《VEL世界》（電波）―デバイス（澤真）《の
形。なんというか、隣町に行くには山を越えないと行けないんだ
ど、面倒なんでトンネル掘っちゃいました的な感じ。

これなら上空から世界を眺めてる神に気づかれない。暴れたとし
ても、足跡さえきちんと消せばなんとかなるだろう。

その要領で逸哉はVELにいる澤真に話しかけ、彼の装備を自由
自在に操ることに成功した。外から操作する逸哉の力で、澤真は思
うがままの力を手に入れVELで最強の救世主になった。そしてそ
の三時間後、逸哉自身もフェレットの姿としてだがVELに身体を
映し出すことが出来た。

すべて順調、このままクラッカーを追い詰めようと力んでいた逸
哉だが、一つ問題が起きた。それは共にに戦うはずの澤真の我が儘
から始まった。

* * *

「逸哉、一度渋谷に戻ってくれないか？」

突然の言葉に、フェレット姿の逸哉は目を丸くして澤真を見つめる。

「なにいつてんだ、渋谷にもう用はないだろ」

「黒髪の女の人……」

後ろめたさがあるのだろう。もごもごと小さな声で喋る澤真。逸哉は四本足でテコテコ歩き、澤真の足元から顔を見上げた。

「待ってるっていったんだ、あの人。お礼言いに、帰らなきゃ」

「お礼って、あの女に何かされたわけじゃないだろ」

「助けてもらったよ。あの人がいたから頑張れたんだ」

「澤真が頑張れたのは俺のおかげだろ？」

「技術的にじゃなくて精神的に！」

話しているうちに澤真が熱を持ち始めた。きりが無いと思い、逸哉は澤真の顔面に広がるモニターに渋谷までのルートを表示した。プウウとフェレットのため息がよくわからない鳴き声を発し、澤真の肩に乗る。

「渋谷までの地図だ。真っ直ぐ走るだけだな」

「あ、ありがとう逸哉！」

「……言っとくけど、あの女が妙な動きしても応えるんじゃないぞ？」

「妙な動きって？」

「身体触ってきたり」

「から……逸哉おまえ、エロいこと言うな！」

「はあ？ どこがだよ。あと、仲間にするなんてもっての外だから

な」

「仲間か……」

「おい、何考えてる？」

生意気フレットが、妄想に浸る澤真の頬に足蹴を食らわせた。

* * *

少し立ち寄るだけ、害はない。その安易な考えが大きな間違いだった。

「私も連れて行ってください！」

戻ってきた澤真を見るなり黒髪の女性が言った。他の人々は澤真と彼女の周りに円をつくり、二人のやり取りを見守っている。

「連れて行くって……」

困惑した澤真は首に巻き付いているフレットの逸哉を見た。逸哉は「そらみろ」と言わんばかりに澤真を睨み、首を横に振った。

「ごめん、連れて行くのはダメみたい」

苦笑いで言ったが彼女は顔色を変えず、鞆の中から包帯やらすり鉢やら、医療道具を取り出し澤真の眼前に突きつけた。

「このエリアの人たちの怪我は私が治しました」

見渡すと、確かに人々の腕には包帯が巻かれていた。同時に、女

性に対する優しい、感謝するような眼差し。

「見たわけじゃないけど、きつと違うエリアも大変なことになって、あなたが助けたんでしょ？ 私だって人を救いたい。救世主様の仲間に、医療班は必須でしょ？」

ギリギリまで近づく綺麗な顔、澤真は唇を噛むようにして何とか堪えた、”理性は”。

「だよなー、一緒に行こう！」

* * *

よく聞けば、^{ユキナ}「雪菜」と名乗る黒髪の女性は看護師の卵らしい。もちろん現実^{リアル}で。逸哉は雪菜を連れていくことに反対したが、医療班が必要だと訴える澤真の熱弁に負けた。というか、面倒になった。深夜二時前、逸哉は澤真にかけていた毛布を剥ぎ取り、椅子に座ったままそれにくるまった。首もとまですっぽり包み、パソコンとモニターを見比べる。

「未曾有の事態。強者に憧れたり、彼について行けば自分は助かるかもって気持ちにはわかる。だけど……冷静過ぎないか？」

彼女を信用しているわけではない。だけど全てが闇の今、大袈裟に行動を起こすべきでない。

椅子にもたれかかり、額に手を当て眠気を抑える。

「これを以て、VEL解体報告一日目とする。……残り時間、九日」

逸哉の声にフンテンポ遅れて、パソコンに同じ言葉が打ち出された。

狼とシンバ

VEL渋谷エリア。空き家を借り寝ていた澤真は窓ガラスの破裂音で目を覚ました。慌ててベッドから飛び起きる。外に逃げようとしたが、部屋の真ん中にもぞもぞと動く影があつてそれが出来なかった。

「なんだよ……新しい敵か何か？　こんな真夜中に」

唇を噛み後退る。脇にいていた剣の柄に手をやった。

「おい、逸哉。どうすればいい？」

剣を握った反対の手で逸哉フェレットの身体を揺らす。しかしフェレットはびくりともせず、枕元にごろんと転がった。

「は？　逸哉？」

慌ててフェレットの身体を片手で支える。やはり目を瞑ったまま、動こうとしない。

「ちょ……なに？　故障？　どうすんだよ……」

背中から嫌な汗が流れた。部屋の真ん中にある影が四本足で立ち上がる。毛むくじやらない身体に長い尻尾、ピンと尖った耳に垂れた舌。

「犬……いや、オオカミ？」

昼間見たハチ公と比べ、なんとなく身体の作りが立派だった。トゲトゲ固そうな毛並み、少しやせた胴体。写真で観たのとはほぼ同じ、銀色の毛が月の光に照らされた。

斬ればいいか？

覚悟を決めて腕に力を入れたとき、ふいに部屋の扉が開いた。

「物音が聞こえたけど、大丈夫ですかっ!？」

勢いよく開けられたドアから出てきたのは、隣の部屋で寝てるはずの雪菜だった。クリーム色のスウェット、腕には長い木の棒。髪を下ろしているが化粧はしたまま。そういえば、風呂に入っていない。「きゃっ」と可愛らしい悲鳴が聞こえた。雪菜の足元にはオオカミがうずくまり、どうやら勢い余って蹴飛ばしてしまっただけらしい。

「なにこの生き物……タクマさんっ!」

名前を呼ばれる前に、澤真は剣を握り大きく振りかざしていた。どうせゲームのオプションだろ。昼間の続き、残党に過ぎない。そう自分を納得させ、オオカミを斬ろうとした。

「……わ、まじ……やばっ」

刃がオオカミの身体に触れる、その瞬間、獣の口から人間の言葉が聞こえた。と同時に、オオカミの姿が消えて澤真の剣は床に突き刺さった。

「……え？」

何が起こったかわからず、目の前にいる雪菜を見る。次に、唸然

と澤真の後ろを見つめる雪菜の視線を追って自分も振り返った。

ジ、ジジッと無機質な音を立て、オオカミの身体が再構築されているところだった。ところどころモザイクがかかったオオカミの身体、しばらくするとモザイクがなくなり身体のラインがはっきりと見えた。

銀色の毛並み、尖った耳に鋭い牙。ぎよろつとした大きな瞳が、澤真を睨んだ。

「あぶねかったー、侵入できた途端これかよ。すげーな、あんた！」
だが予想を反し、オオカミは陽気な声で流暢に日本語を喋った。

「あんたら、VELに閉じこめられた人間だよな？ 俺の声が聞こえてたら返事してくれ！」

「え、返事って……」

「うわー！ マジで会話出来る！ VELに侵入できた、オレ天才！」

大きな口を開けてオオカミが笑う。その様子を、澤真と雪菜はポカンと口を開けて見ていた。やがてオオカミが場のしらけさに気付き、二人を交互に見つめる。

「男のほうがタクマで女がユキナ」

名前当てをしながらケラケラ笑う、オオカミを眺めながら澤真はベッドに転がっている逸哉フェレットを見た。動物が、喋ることは慣れてる。まさか……

「言ってもわかんねーかもしれないけどオレ、VELの外、現実リアルの世界から来たハッカーなんだ！ よろしくな、タクマにユキナ！」

本来、実力のある技術者は「俺はハッカーだ！」なんて自己紹介はさないらしい。

『名乗るバカがいるとしたら、中途半端にかじってるやつか……子どもだ』

「現実リアルでの名前は榛葉シンバリオウ棕、今年**高校に入学する一五歳だ！シンバンって気軽に呼んでくれな！」

あーうん、子どもだ。

狼とシンバ（後書き）

忙しくて更新遅れました。
すみません

裏切り者と信頼

オオカミの姿をしたハッカー、榛葉^{シンバ}棕が現れて一時間程経った頃、明け方の三時過ぎ、ようやくフェレットが動いた。

何してたんだと文句を言ったが、逸哉フェレットは面倒そうに「寝てた。自分でもびっくりした」と呟くただだった。

「で、あんたがそのハッカー？」

フェレットの瞳がシンバを捉える。シンバは嬉しそうに大口を開け喋った。

「榛葉棕、シンバって呼んでくれ！」

逸哉の、いや、フェレットのきゅーと可愛い鳴き声が聞こえると同時に、「子どもだな」と逸哉の低い声が聞こえた。

「でもまあ、これだけ罠があるVELに侵入できたのは凄い」

「だろー！ やばい状況になってると思って、昼からずーっとハッキングしてたんだ」

「へえ、昼からなら約十二時間？ まだ中学生だったよな、たいしたもんだ」

「違う、今年の春から高校生になるんだ！」

偉そうに腕を組むフェレットと尻尾をパタパタさせて嬉しそうなオオカミの会話。どこの絵本だと思った。それにしても……

「逸哉、お前……雪菜には厳しかったのにシンバとは普通に会話し

てるな？」

離れた場所から澤真が尋ねると、フェレットの首がぐりんと回ってこっちを向いた。

「いやいや、だって、こいつの個人情報ば抜いてるから」

ケロッという逸哉の言葉に、その場にいた全員声が出なかった。

「そっちの女は開発会社を経由してVELにアクセスしてるだろ？ 開発会社に侵入するのはまだ無理だから個人情報ば抜けない、デバイス番号しかわかんないんだ。でもシンバの場合は直接VELに接続してるから、シンバのパソコンをハッキングして個人情報やら何やらを調べ上げた」

あれだ。またシステムやらハッキングやらIT何やらの説明だ。澤真は意味がわからないなりに、頷いて話を聞いていた。

「でも、だからと言って完全に信頼したわけじゃないぞ。おかしいことしたらすぐに攻撃するからな」

フェレットがオオカミの鼻を叩いた。シンバは嬉しそうに笑い、「大丈夫だ！」と応えた。確かに、悪そうなやつじゃない。

「でさ、イツヤたちはこれからどうすんの？ クラッカーをやっつける作戦とかもう考えてんの？」

突然の質問に、澤真と逸哉はお互い目を合わせた。

「いや、特に……」

「仲間を募りましょう！」

叫んだのは雪菜だった。「シンバさんみたいなハッカーや、他のプレイヤーさんや、まずは仲間を集めましょう。三人そろえば文殊の知恵っていうじゃないですか、人は多いほうがいいです」

胸の前で両手を組んで楽しそうに提案する雪菜を見ながら、澤真は横から厳しい視線を感じて恐る恐る振り返った。澤真を睨むフェレットの瞳が、「そら見る。変なこと言い出したぞ、この女」と無言で語っていた。

「いやでも、仲間とか冒険ばくて楽しいじゃん？ 心強いしさ」

「俺はこれ以上、余計なところに気を回したくない。こいつは信用出来るのかとか、裏切る可能性はとか」

「それは後々でいいだろ。まずは一緒に過ごして、それから考えればよくな？」

「悪いが俺は性悪説派だ。まずは疑ってかからないと、躓いた時に後悔する」

ピシッと持論を言い切る逸哉にそれ以上何も言えず、澤真は黙り込んで下を向いた。

出会った頃から思っていたが、逸哉は本当に職人肌だと思う。プログラムを作るのが好きと聞いて、何となく納得した。ミスを許さない、まずは疑ってかかれ、自分にも他人にも。社会人ばい、大人だとは思う。でもそれ故、他人の意見を聞き入れることが困難、柔軟性に欠ける。

逸哉に作ってもらった剣を握り締め、視線をあげて黒染めされた前髪を睨んだ。

「それでも俺は、逸哉を信用するしかないんだよな」

小さく呟いた言葉を、逸哉が聞いていたかどうかは知らない。

裏切り者と信頼（後書き）

更新遅くて申し訳ないです。

感想ください！↑？

夜明け前

「まず始めに、ゆっくりでいいからVELを歩こうか」

腕を組んで偉そに言うフレットの指示に従い、澤真と雪菜、そしてハッカーとして入り込んだシンバも共にVEL内を探索することになった。逸哉曰わく、少しでも内部の情報が欲しいらしい。「澤真の活動した範囲なら、VELの情報をいろいろ抜き出すことができる」逸哉が言い、シンバと共にプレイヤーを救済する作戦を考えていた。フレットとオオカミの作戦会議は、前にも言ったかもしれないが、御伽噺以外の何ものでもなかった。

「澤真だけなら簡単に違うエリアに移動させることができるんだが……」

逸哉はチラッと雪菜を窺ったあと、ため息をついて目を逸らせた。

「まあ、ひたすら歩く方法で行こうか」

雪菜は雪菜で鈍感なのか気にしないようにしているだけなのか、終始笑顔で逸哉の話を聞いていた。

「まず、幸いなことにお前ら二人に食糧は必要ない」

「ええっ、ご飯はあるだろ！」

「バカ。」ここ”は仮想世界、機械の中だぞ。食事なんかなくても生きていける」

「でも気分的に……」

「どうしても何か食べたいなら、シンバでもさばいて食べるんだな」
「ちょ……俺はオオカミの姿してるだけで、実体ないってか、オオカミなんか食っても……」

「あの、それでしたら」

男三人のやりとりで雪菜が口を挟んだ。手を挙げておずおずと、可憐な声で意見を言う。

「実体……現実^{リアル}のほうの私たちは、どうなるのでしょうか？ ログアウト出来ないってことはずっと昏睡状態、食事もできませんよね？」

不意をついた質問に目を丸くした逸哉だったが、すぐに睨むような目つきに変わった。

「あんた、身体は強いほう？」

「強い？」

「健康かそうじゃないか」

「ああ。普通、だと思います」

「普通、ね。まあ、よっぽどじゃない限り大丈夫だと思うけど……家族は？」

「兄が一人います」

「そうじゃなくて、一人暮らしかそうじゃないかってこと」

「一人暮らしじゃないけど……」

口を開くたび、雪菜の声が小さくなっていくようだった。ふと雪菜が、澤真のほうを向いた。冷や冷やしながら様子を見ていた澤真は雪菜と目があったことにより、よくわからない正義感みたいなものに駆られた。

「い、逸哉！ そういう個人情報って必要なんだろうか？」

「は？」

「家族がどうか聞かなくてもさ、雪菜は雪菜じゃん？」

「お前はホント、何もわかってないな」

逸哉はため息をつき、短い手で自分の（フェレットの）頭を掻いた。

「あー、確かに。遠回しにいらんこと聞き過ぎたな、悪い。単直に聞くとな雪菜、あんたが寝たきり状態になった時、それに気付いてくれる人間がいるかどうかって話なんだ」

それでも十分個人情報じゃないかとは思ったが、事情が事情なので澤真はそれ以上口を挟まないことにした。雪菜は小さく頷き、「たぶん大丈夫です」とだけ言った。"たぶん"が気になったが、逸哉が目に見えて怒りの表情を出していたので何も言わないでおいた。それにしても……

「？　なんだよ、澤真」

見すぎていただろうか、逸哉フェレットが怪訝な顔をした。澤真は何でもない慌てて視線を逸らした。

『悪い』と、逸哉が謝った。しかも『雪菜』って名前呼んだ、初めてだ。

顔を上げると、オオカミなシンバと作戦会議をしている逸哉フェレットがいた。その隣、鈍感なのか能面なのか、相変わらず微笑んでいる雪菜がいた。

* * *

「夜明けと共に出発しよう。あと30分くらいか」

壁掛け時計を見ながら逸哉が言った。結局、一晚徹夜してしまつたわけだがたいして辛いとも思わず、澤真は身支度を整えようとクローゼットから衣服を取り出した。

「なに、着替えんの？」

ベッドの脇に丸まっていたフェレットが声をかけてきた。澤真は服を眺めながら答える。

「あー、何かいい服ないかなと思って。戦闘用のさ」

「ふーん。どんなのが好み？」

「好み？ まあ、鎧とかあれば格好いいかもな」

「鎧か。却下だな、俺の趣味じゃない」

つん、と言い放った逸哉の言葉に、澤真は少しだけむっとした。振り向かないまま会話を続ける。

「別に逸哉の趣味は聞いてないだろ」

「戦闘用でいいんだよな？ シックな狐の仮面と併せると、やっぱ牧師みたいな格好のほうがいいな」

「牧師ってお前。……っかさつきから何の話してんの？」

澤真が振り返ると同時、フェレットが首回りにひっついて全身にモザイクがかかった。耳元にフェレットの吐息と、きゅきゅきゅっという可愛らしい鳴き声が聞こえる。

「よし、こんなもんだろ」

しばらくするとモザイクが消え、澤真の寝間着は真っ黒な修道服に変わっていた。はっとして鏡を見ると髪の色は金髪、戦闘時に被っていた仮面をつけていた。

「ちょ、逸哉これ……」

「お前の戦闘服を俺なりにアレンジしてみた。どうだ？」

「どうもこうも、ダサ……」

「い、イツヤすげー！　なんだ、今の。どうやってタクマの服変えたんだ？」

「お似合いです、タクマさん」

物申そうとした澤真だが、興奮したシンバと微笑む雪菜の声に遮られた。

「いや、あの、俺は……」

「俺は澤真のデバイスをいじれるからな」

「うわっ、やっぱりイツヤすげー！　尊敬する！」

「ああ、思う存分尊敬しろ」

「あの、俺の意見は……」

「ちなみに、普通の時の服は適当でいいだろ？」

逸哉の声と同時に、再び身体にモザイクがかかり服が変わった。次は胸にワンポイントのクマ印が入ったダッサイティシャツに半パン。さすがにこれはない。

「また服が変わった！　イツヤすげー！」

「お似合いですよ、澤真さん」

シンバはまあ、子どもだとして……

「あのさ、雪菜。お似合いってのは、失礼じゃないかな？」

「へ？ 何がですか？」

「いや、何がって……いや……」

嫌みで言ってるのではない。天然、可愛いじゃないかと無理やり自分を納得させることにした。

夜明け境界線

夜明けと共に辿り着いた境界線、そこに現れたのは昼間現れたより少し強いくらいのモンスターたちだった。渋谷エリアに居た野犬に始まり、ローマエリアの翼竜まで。先日の戦いで場慣れしていた澤真は反射的に剣を取り、襲ってくるモンスターたちを次々とやつつけた。というか、

「炎、水、雷に風を吹かす力。他に何がある？」

”タクマ”を操作する逸哉の技術によって、雑魚程度の敵なら剣を一振りするだけで簡単に倒せた。

「つか、何でもまだモンスターがいんの？ 昨日倒したんじゃないの？ たっけ？」

「朝になるとモンスターを出現させる機能をつけてたみたいだな。時限爆弾のようなやつだ。洒落たオプションつけるな、クラッカーのやつ」

「洒落てねーよ、迷惑だろっ！ あ、シンバごめん」

キャンと子犬が鳴くような声がして、オオカミ姿のシンバが仰け反った。野犬と似ているもんだから、間違えて斬りつけてしまったのである。シンバは四本足で受け身をとったあと、澤真を睨んだ。

「タクマ！ さっきから何回目だ。俺は味方だぞ！」

「わかってるけどさ。だってその姿、敵の野犬と被るんだ」

「おい、シンバ。今だけ姿変えたらどうだ？」

木の上から高みの見物をしている逸哉フェレットがぽつりと言った。澤真は剣を振り回しながら上を向き、シンバは駆け足でフェレットが居る木に登った。

「シンバは外部からハッキングしてんだから、ヴィジョンくらい自由自在に変えられるだろ？」

隣に座ったシンバに言うと、オオカミの頭が激しく横に振れた。

「嫌だ、俺はこの姿が気に入ってたんだ」

「なんだそのこだわり。姿形なんてどうでもいいだろ。俺なんかフェレットだぞ？」

「かつこいいじゃん、逸哉フェレット！」

「格好良いかあ？」

「俺もイツヤに負けないくらい、かつこよくなりたいんだ。だから、オオカミのままにいる」

「まあ、好きにすればいいけど。あんま切られんなよ。映像を修復するのに手間がかかるだろ」

「わかった、気をつける！」

どうやら動物の会話は落ち着いたらしい。咄然とそれを眺めていた澤真はため息をつき、剣を一振りして雷を起こした。炎に包まれた翼竜がバチバチと火花を散らし、最後には形を無くして崩れ落ちた。

「終わり。雪菜、出てきていいよ」

もう一度ため息をついて合図すると、木陰に隠れていた雪菜が恐る恐る姿を現した。

「だ、大丈夫ですか？」

「ん、とりあえず大丈夫。もう安心だよ」

「いえ、そうじゃなくて、澤真さんは大丈夫ですか？」

「ん？」

戦闘時に装着している仮面を外しながら雪菜を見ると、彼女は医療道具が入っているという肩掛けのショルダーバックを握りしめていた。

「澤真さんは怪我などしていませんか？ もし痛いところがあったらすぐに治療します！」

片手をぐつと握り締め、力む雪菜の姿はとても愛くるしかった。

「あー、ホント。俺、雪菜がいて良かった」

フェレットとオオカミを一瞥して嫌みっぽく言ったが、動物たちは気にしない様子で澤真を見下ろしていた。

「終わったならさっさと次のエリアに向かうぞ！」

安全圏にいたフェレットが木の上から駆け下り、澤真の首に巻き付いた。

「……逸哉はノー天気なのか天才なのかよくわかんないな」

「は？　なんか言ったか？」

「いや。天才とバカは紙一重だなと思って」

「意味がわからん」

フェレットは興味なさそうに言い、つんと鼻を鳴らした。その途

端、正面の壁がまるで異空間の入り口のように歪み、別エリアへの扉が開いた。

「ここを潜れば隣のエリアへ辿り着く。ああ、それと、澤真の身の安全は保証するが、俺には雪菜を操作することができないから」

言いながら、意味ありげに雪菜を見た。逸哉に視線を送られ、雪菜はただ頷いただけだった。

なんでこの二人、仲が悪い……というか、逸哉が雪菜を敵視するのだろう。澤真は金髪の頭を掻き、もう一度ため息を吐いた。

「行くか、次のエリア。昨日戦った場所、ローマだな」

前髪をかきあげると、肩に乗っていたフェレットが澤真の頬に鼻をこすりつけた。

「ローマはRPGエリアのすぐそばにある。最強に強い人間は殺されてるだろうが、ちょっとした魔法が使えるやつが残ってるかもしれない」

そいつを仲間に出来ればちょっと助かる、と逸哉らしくない言葉でフェレットが微笑んだ。

違和感？

想像通りというか何というか。

ローマエリアに着いた途端、澤真は再び剣を振るうこととなった。決して強くないが、敵の数が多すぎる。鳶のような鳥のモンスター。一匹いつぴき斬り倒していると、フェレットの聞き慣れたため息が聞こえてきた。

「お前さ、そんなちまちましたことして楽しいか？」

明らかに嫌みだとわかる言葉に、澤真は顔だけ振り返り逸哉を睨む。

「楽しいわけないだろ！ 倒さなきゃいけないからやってるだけだ！」

「時間の無駄を……」

「なんだよ、さつきから！ そう思うなら手伝えよ！」

半ばやけくそで鳥獣を切り刻む。「ぎゅえええ」と気持ち悪い声を発し、鳥は姿を消していった。画面の外で聞く敵のうめき声は最高に快感だが、実際に耳にする鳴き声は最高に気持ち悪い。

「獣の鳴き声も煩いしなあ」

不機嫌そうなフェレットが鼻を鳴らす。現実で、^{リアル}面倒くさそうに頭を掻く逸哉の姿が浮かんた。

「なあ、澤真。最初みたいに雷で倒せばいいと思うんだが？」

「は？」

その瞬間、澤真の剣が瞬き始めた。バチバチと火花を散らし、暴れている。

「あー、それより先に水でもぶっかけるか。ほら、剣振り回せ」

フェレットが得意げに鼻を鳴らす。逸哉が魔法を使った証拠だ。剣を頭の上から思いっきり振り下ろすと、そこから大量の水が飛び散った。翼が濡れ、飛行に耐えきれなくなった何十匹かが落ちていく。残った、もう何十匹と向き合い睨みつける。鳥獣は鳴き声をあげ、澤真を威嚇しているようだった。

「それで、残ったやつは雷。水が浸透してるから、効果は倍増だろ」

愉快そうにいい、フェレットがもう一度、鼻を鳴らした。剣に光が蘇る。澤真が剣を振るうと、今度は稲妻が空を駆け巡った。鳥獣目掛けて走り、時に黒こげにして地面に叩きつける。

たった数十秒の間に鳥獣は全滅し、空中には澤真と彼の肩に乗るフェレットしか居なくなった。

「らくしゅう。お疲れ、澤真」

上機嫌なフェレットが澤真の頬に身体を擦り付けてくる。ふわふわの毛並みが若干ウザい。澤真は首を振って逸哉を振り払った。

「逸哉、わかってたんなら最初からそうしろよ……」

「は？ なにが？」

「雷が使えるなら、あいつらを倒すのなんか簡単だっただろ。最初からそういうオプションにしてくれよ」

「……………は？ いやいや、注文してこなかったのは澤真だろ」
「注文？」

「欲しい装備や能力があれば言えっていったろ？ なのに虱潰しに敵を倒してってるからさ、つい俺から手を貸してしまった」

「お前……なんだその教育心！ そんなのいらないから、普通に協力してくれ！」

憤りでフェレットの首を掴もうとした澤真だが、それに気づいた逸哉はするりと澤真の肩を降りた。

「シンバたち待ってるし、先帰ってるなー」

振り向きざまそう言い残し、フェレットは風に乗って地上へ降りていく。その姿を見送る澤真の目には、フェレットが風景と同化しているようにも見えた。

「自由なやつ」

ため息とともに呟き、前髪をかき上げた。

「まあ、この世界を支配する鍵を持ってりゃ、そうもなるかな」

剣を掲げ、フェレットのあとを追うように澤真も地上に降りた。

* * *

地上に降りた澤真を待っていたのは、ローマに取り残されたプレイヤーの歓声や仲間の激励ではなかった。

「一部始終見てたぞ、イツヤ！ やっぱすごいな！」

着地した場所が悪かったのか。そもそもシンバと雪菜はなぜ、誰もいない物陰に隠れていたのか。

フェレットのあとを追って行くと、ビルの陰から空を眺めるシンバと雪菜が見えた。他には誰もいない。フェレットの姿を認めたシンバは尻尾をパタパタさせて近寄ってきた。その後ろから、恐る恐る歩く雪菜。

「イツヤは天才だな、おれ、尊敬する！」

そして耳に届くのはシンバが逸哉を賞賛する無邪気な声。だが、当の逸哉は威張ることなく日陰に丸まった。無愛想な態度を気せず逸哉フェレットに寄り添うオオカミ姿のシンバ。子供向けアニメのようだった。

「身体張って戦ってるのは俺なのになあ」

小さくボヤいた澤真のそばに、雪菜が近寄ってきた。

「すごかったですよタクマさん、お疲れさまです」

野球部のマネージャーのような笑顔とともに、桜色のタオルが差し出される。

すごかったも何も、見ていなかっただろうに……

「ありがとう」

ゲームの中なので汗は出ていないが、戦闘時に装置する狐の仮面を剥ぎ取りとりあえずタオルで顔を拭く。

そういえば、タオルより何より、身に着けているこのダサイ修道服を洗濯して欲しい。汗は気にならないけど何となく。

「ま、そんなことも逸哉がいないと出来ないしな」

タオルから顔を出し、ふうと息を吐きながら言つと、雪菜が首を傾げた。澤真は冷静にフオローを入れる。

「何でもない。ただ、俺は逸哉がいないと何もできないってことだよ」

「そんな……」

「今だって、逸哉のおかげであいつらを倒すことができたんだ」

「それは違いますよ」

やけくそみたいに語る澤真の腕を掴み、雪菜が見上げた。

「タクマさんがいるから、イツヤさんが魔法使いになれるんです」

いつになく、真剣な瞳で雪菜が言う。「もしこの世界にタクマさんがいなかったら、イツヤさんは能力を発揮できなかったんですよ？」

「それは、そうだけど」

「だから、すごいのはタクマさんです。私はタクマさんを尊敬します」

最後の言葉とともに、雪菜が微笑んだ。優しい笑顔を見ると自分の悩みがくだらないことのように思えてきて、澤真は恥ずかしそうに人差し指で頬を掻いた。

「あー、うん……ありがとう」

澤真の言葉を聞き、雪菜はよりいっそう綺麗な笑顔を見せた。

* * *

「……澤真がいるから俺が能力を発揮できる?」

澤真と雪菜のやりとりを遠目から見ていた逸哉のフェレットが訝しそくに首を傾げた。隣にいたシンバは鼻を鳴らして逸哉を見る。

「どうした、イツヤ?」

「いや……なんだろう、この違和感」

「いわかん?」

「なあ、シンバ。今の言葉気にならなかったか?」

「なにが? ああ、タクマがいるからってやつ? 当然じゃん、イツヤはタクマのデバイスを使って剣とか雷とか作り出してんだろ。タクマがログインしてなかったら、イツヤはただの傍観者だ、オレと同じ」

ビシッと、シンバは胸を張って言った。逸哉は呆れ、大きなため息をつく。

「確かに、シンバや俺は姿を映し出すところはあるけどVEL世界に影響を及ぼすことはできないもんな。それがシステムの構造……なんだけどさ、なんだこの違和感」

丸まって再び考え始める逸哉フェレットの身体を、シンバは慰めるようにつついた。

「まあ、気になることがあるなら、頭の隅に入れとけば? そのう

ち何かと繋がって問題解決するかもだし！」

「……脳天気だな、シンバ」

小ばかにしたように言った逸哉だが、シンバは気にすることなく、嬉しそうにフレットの身体に寄り添った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9321r/>

仮想体験型世界『VEL』

2011年10月6日15時01分発行